

この「90年代の学校事務（試案）」は学校事務の「領域」が提起されて10年間の集大成と今後に向けての課題と学校事務の展望をめざし、次のように記述してあります。

学校事務の「領域」が提起されて10数年が経とうとしています。この領域の取組は学校を機能化させ、「学校を変える運動」と連動した学校事務をとおしての変革の論としてとらえられます。このことは、運動論として語られるため個人的な取り組みとか力量とかに矮小化されるという危険性をもつものとの指摘も多くされます。提起されて10数年経ちますが、未だに難解との声が強くなるのは、そういった形が見えにくい「論」として多く語られてきたこともその一因と考えられます。

しかしながら、「領域」の提起もまた時代的背景を色濃く反映したものといえます。それは、教育・学校の危機的状況が語られ、「教育改革」論議の色々な方面からさげられた状況から必然の論理としてとらえられます。学校事務を通して子どもの生活の場である「学校」をどう変革していくのかという課題から、これにこたえるものとして「領域」があったといえます。～略～

全国的にすすめられている職務の標準化の動き、資格論、職指定の問題、コンピュータ問題など学校事務のあり方を問う基本的な論議も活発にされてきています。これらの問題を考えるうえで、教育・学校をどうとらえるかの問い返しが不十分であってはなりません。「行政」系列化志向の学校事務論も未だ根強いものがありますが、運動論と職務論とは相容れないとする考えと合わせ、ここから「学校」に配置された「事務職員」、そしてその「労働」は見えてきません。現状をどう認識し、この全面的疎外ともいえる状況をどう克服していくのかという課題に対していくことが重要であり、「領域」の運動がそれを起点にしていることから、さらに発展していくものであります。